

楽習

gakushu





教科•校種•業種

教科を超える

大阪では、公立・私立を問わず、さまざまな学校が授業をさらに良くしたいと考えて、教科を超えた授業研究に挑戦されています。

校種や業種を超える

異なる校種や業種間での授業づく りにおいて、授業のコンセプトを共有 する際にメタファ(たとえ)を用いた事 例を紹介します。



先生たちの専門を超えた学び合い

"違い"を活かす

学校教員は、教職生活の全体を通じて自発的に資質能力を高めることが期待されているので、校内研修を充実させることが重要です。とくにこれからは、若手の先生も含めて誰もが参加しやすく、さまざまな教科の公開授業にも関心をもって参加できるような研修が望まれます。

そのため、外部講師を招いた講義型の研修や、議長が進行する会 議型の研修だけでなく、ワークショップ型の研修や、授業記録をとる など具体的な事例を研究するタイプの研修が採用されています。

経験や専門領域の異なる先生方が、お互いから学ぶことが素晴ら しいものであると感じられるのは、どのような場面なのか。

そして、そのような場をどのようにして創ることができるか。

この小冊子では、専門を超えた先生方の 学びの事例をいくつかお伝えします。





学び方を学ぶ授業を目指す 大阪の学校の挑戦

教科を超える

豊中市立第七中学校 学校法人清教学園中·高等学校 大阪府立高石高等学校

さまざまな教科間ならではの学び

校内全体で、小グループで。。事情に応じて柔軟な方法を

大阪の学校教育は、市民からの寄付金を扱う財団から、教員研修のための助成金が出されるなど、市民の教育への高い関心に支えられています。2013年度はこのような助成金を活用しながら、大阪の先生方と校内研修がより充実したものとなるよう、とくにさまざまな教科間と協力しながら行う授業研究をベースにした校内研修の在り方を模索する機会を得ることができました。

授業研究をベースとした校内研修の実施形態は 学校によってさまざまで、組織全体で授業研究に取り組める場合と、そうでない場合があり、それぞれ強 みがあります。例えば、豊中市立第七中学校のよう に校内全体で授業研究できる場合は、校内のビジョ ンが共有しやすく、管理職の先生も一緒に参加する ことができます。ただ、全員が集合するということは、 スケジュールを調整する必要があり、頻繁に開催することが困難です。 全員が取り組めるようにスケジュール調整が困難である場合は、学校法人清教学園中・高等学校や大阪府立高石高校のように、まずは有志で小グループをいくつか作って、それぞれでスケジュールを調整しながら行うこともできます。こちらの方法は、例えば事前に録画した授業をみてから協議に臨むなど、協議のすすめかたや議題も柔軟に選ぶことができるので、研修主任の先生一人が不安や負担を抱えなくてもすみます。ただ、各々で進み具合が異なるので、研修主任の先生や管理職の先生が状況を把握できるしくみが必要です。

| 形態 | 開催日•回数 | 取り組み方・強み |
|------|--------|-------------|
| 校内全体 | 1回/1学期 | 参観後に協議する。全 |
| | | 員で考えを共有できる。 |
| グループ | 1~4回(グ | 録画記録を見て参加す |
| | ループ毎で多 | るなど柔軟。状況把握 |
| | 様) | の仕組みが必要。 |



着眼点

| 学期 | 着眼点 | |
|----|------------------------------|--|
| | ・ 授業の見通し | |
| 1 | ・ 生徒の活躍する場 | |
| | • 言語活動 | |
| | ねらいに即した発問 | |
| | であるかどうか | |
| 2 | 子どもの心を動かし、 | |
| | 多様な考えを引き出して | |
| | いるか | |
| 3 | (自由) | |

1回目から2回目にかけて、かなり構成的に着眼点を絞り、最後は自由に意見交換ができるようになっています。

つなぐ場創り

豊中市立第七中学校は、校内研修のレベルを高める役割を担う 先生方が、校長先生と相談しながら、さまざまな教科の先生同士 で授業研究を行うための研修を企画されました。どのようなことを 考えながら研修をつくってこられたのかについて、研修をコーディ ネートされた先生にお話を伺いました。

「これまでに経験した校内研修は、授業を参観した後口の字型に座り、発言する人が限られていたものもありました。そのような研修は、とくに若手が発言しにくかったので、若手でも発言しやすい場を作りたいと考えていました。やはり授業を変えていく必要があると思うので、どの先生も参加できるようなものであるべきだと思います。そのためワークショップ形式で行いました。」

研修会場となった部屋には、複数のテーブルが配置されていて、4・5人でテーブルにつくようになっており、テーブル上には模造紙とペンが置かれ、話しやすい雰囲気になっていました。グループメンバーは毎回異なり、経験年数や教科の異なる先生方が話せるように構成されていました。

2回目までは、参観の着眼点や協議のテーマをある程度決めて 行われました。グループ毎で異なる視点から考え、その後全グ ループで共有することもありました。また教科の授業を検討するだ けでなく、道徳であれば授業の組み方について話がしやすいと考 えられ、道徳の指導案を新たに作成しながら協議をすすめる活動 も取り入れられていました。

「このような形態は今年度から始めましたが、まだまだ結果には満足しておりません。今年度はあまりいろいろな先生を巻き込んで企画できなかったので、次年度はより様々な先生方と一緒に企画できたらと思います。そして、この進め方はどうなのか、外部の方からの情報や意見も聞きながらすすめていきたいです。」



自律的に取り組む授業研究

複数教科でチームを創る

同じクラスの生徒の異なる表情を共有

チームを組んで授業を研究する時に、同じクラスを対象として、 異なる教科・形態で授業を行い、授業を参観したり記録ビデオを 確認すると、同じ生徒の異なる表情を知ることができます。例え ば、清教学園の中学校の先生チームは、生徒がグループになって 作問することを通して文章を読み解くタイプの国語の授業と、電子 黒板を使った数学の授業を同じクラスで行いました。国語の授業 の様子をみた数学の先生は、「あの〇クラスの生徒は、実はこんな ふうに学ぶことができるんですね。」と驚き、「講義型から脱却した い。数学の授業でも、このようなことをやってみたいです。」と宣言 する様子がみられました。数学の授業では、とても行儀よく授業を 聞き、指名されるときちんと答える生徒たちも、国語の授業では、 わからないことをわからないと言うなど、中学生らしい姿を見せなが らも、友だちと協力して学び合っていました。

繰り返し実施して「もっと話したい」話題へ

一方で、清教学園の高校の先生チームは、所属メンバーの授業をビデオで記録し、他のメンバーが協議会に参加する前にビデオ記録をみて感じたことを付箋に書いて協議会に持ち寄るという方法で進めていました。所属メンバーが順番に授業を記録し、協議会が行われますので、メンバーの人数分だけ繰り返し行われるようになっています。

すると、3回目から協議の様子に変化がみられるようになりました。3回目は事前に気づきを書いて持ち寄る付箋紙の数が1人5枚ずつに増え、話題も「どのような姿が主体的に学んでいると言えるか」といった本質的なものが取り上げられました。この協議を終えるとき、一人の先生が「もっと話したいな」とつぶやかれていました。

今後、清教学園の中学校チームと高校チームが、それぞれ異なる方法の強みを紹介しあうことによって、より効果的な取り組みに発展していくのではと感じられました。



学校法人清教学園

研究チーム

| | メンバー, 方法, 時間 | |
|----------------------------------|-------------------------------|--|
| 中学校 | <メンバー構成> | |
| | 数学、国語、理科 | |
| | ・同じクラスに数・国を実施 | |
| | •協議時間約30分間/1件 | |
| | ビデオを再生しながら感 | |
| | じたことを共有 | |
| 高校 | <メンバー構成> | |
| | 保健体育、数学、社会、社 | |
| | 会、理科 | |
| | 事前にビデオを見て気づ | |
| | いたことを付箋に書いて持 | |
| | ち寄る | |
| | •協議時間約30分間/1件 | |
| | <協議テーマ> | |
| | 1回目:発問の方法 | |
| | 2回目:発問の方法 | |
| | 3回目:学習者の主体性 | |
| VAC 20 04 14 24 A 5 24 14 1 22 5 | | |

※ 現時点で協議会の実施とその 記録は3回目まで

教育実践研究ノート

"違い"から学ぶ授業づくり

異なる教科の先生の協力を得ながら授業をシミュレートし、授業中の生徒の反応を予想しながら授業を組み立てることもできます。例えば、京都市の採用1年目研修では、机上の模擬授業を通して、さまざまな教科の先生が協力しながら授業作りに取り組んでいます。異なる教科の先生同士で授業のシミュレートを行うことで、どのような気づきを得ることができるでしょうか。

専門の違いから子どもの心理を知る

技術科と美術科のチームは、「げんのう」という名前 の道具の両端の形の違いから、道具の使い方につ いて推測する授業を考えましたが、生徒役になった 社会科のチームは「なぜ『げんのう』という名前なの か」という点に関心をもちました。しかし、社会科チー ムは模擬授業中に質問できませんでした。授業を止 めてしまうと思ったからです。このことから、生徒役の 関心の示し方は必ずしも授業者が重視したい学習 目標(道具の使い方を知る)と合致するとは限らない ことや、生徒は授業中に質問したいことがいろいろあ るけれども、気を遣って質問できないことがある(そ のため隣同士で小声で確認したりすることもあるがそ れが私語と認識されてしまう)ということを確認しまし た。そして、チームの中で1人しかいなかった美術科 の先生は、一緒に授業をつくりながら、技術科の2人 の先生が当たり前のように「げんのう」と呼び合うこと に違和感を持っていたことを告白しました。

学習指導案は何を書くものなのか?

この机上の模擬授業を終えて、それぞれが考えた 授業の展開を振り返った後、研修プログラムの資料 には「学習指導案は何のために書くのでしょうか。」という問が示されていました。「授業の軸を見失わないようにする」など、それぞれの考えが出される中で、 美術科の先生がこのように発言しました。

「どのように教えるのかを書くものではなく、さまざまな子どもがどのような反応を示すかを書くものではないかと思いました。」

*「机上の模擬授業」とは

1970年代に京都教育大学で開発されたシミュレーションゲーム型の授業設計方法(※1)を基調としてつくられたカードシミュレーションです。

- 1)チームの中で1名の指導案を選んで、とくに検討したい 10 分間の判断過程や行為(説明、発問、課題の提示、指導等)をカードで提示できるようにする。
- 2) 教師役を演ずる教員チームとは異なる教科の教員 チームが生徒役になり、生徒役同士は自由に話し合いながら、おこりうる反応をカードに記述して示してもらう。なお、基本的に教師役とは口頭でのやり取りは交わすことができないが、必要だと判断されたときは、教師役チームが相談して介入し、記録を残しておく。
- 3)教師役が中心となってチームで分析し再設計する。
- 4) 再設計の結果を他のチームに説明する。

※ 1

西之園晴夫(1975) 授業設計のためのシミュレーションケームと 授業過程設計書の修正方法. 京都教育大學紀要,A,人 文・社会 46,47-61

校種や業種を超える

校種や業種を超えて協力しながら、教材を作成したり、その技術を 高めることも可能です(例えば「学習開発技術講座」)。そのときに、教 材作成者同士をつなぐのが「メタファ(たとえ)」です。例えば、中学校 の数学の先生が、さまざまな角度の求め方を考えるための教材を小学 校の先生と開発するとき、「マラソン」というメタファを共有しました。必 要であれば時折ヒントを補給してもよいというイメージがより伝わりやす いような教材のサンプルを、小学校の先生の力を借りながら作成し、 企業の方々が教材を使って学びました。生徒役の方々は、わからない ときは純粋に「わからない」とつぶやきます。それをビデオカメラや紙面 で記録しながら、教材を修正することができます。



先生たちの専門を超えた学び合い

ILD-Report 2014 Spring

【 謝辞 】 2013年度の大阪府・大阪市内での実践は、大阪コミュニティ財団の「大阪府教員のための梶本基金」により行われました。関係者の皆様にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。



NPO 法人学習開発研究所は、たえず変動している 社会にあってますます多様化している学習者の実態 に対応するための学習の開発を目指します。

教育実践結果を広く共有してくださる会員を募集するとともに、現在非会員のみなさまにも、ぜひ会員としてご支援頂けるよう、ご協力お願い致します。





http://www.u-manabi.org/

〒612-8105

京都市伏見区東奉行町1番地 桃山グランドハイツ714

TEL/FAX: 075-601-1423 e-mail: info@u-manabi.org